

# つたのは通信

特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

## 植木屋以前の染井の謎を探る

— 「麴室」から出土した古九谷 —



豊島区の本格的な発掘調査は、今から20年前の1988年に日本郵船地区（現駒込フラット）から始まりました。そんな節目の年にあたる今年、この隣の敷地を調査する機会に恵まれました。

染井遺跡 旧興銀ひろば整備地区は、調査面積約800㎡、敷地面積が約3,800㎡と豊島区内ではかなり広い調査です。調査は、7月から2ヶ月間、行いました。夏真っ盛りです。広すぎる敷地には強い日差しが一日中照りつけ、とても暑い思いをしました。

この場所は、江戸時代に桜草の栽培で有名な植木屋 伊藤重兵衛の屋敷地の一角にあたります。伊藤小右衛門の分家筋にあたり、代々重兵衛を名乗っています。調査では、あちらこちらに植物が植えられ、花壇と考えられる細長い植え込みの跡も見つかっています。このことから、染井を代表する植木屋 伊藤伊兵衛の庭のような回遊式庭園であったと考えています。屋敷地のすぐ北側は崖で見晴らしもよく、当時は飛鳥山も見えて素晴らしい眺望だったことでしょう。

## 「麴室」と古九谷

染井の植木屋でよく見つかる遺構に「植木屋」と呼ばれる、やや雑につくられた地下室があります。今回も数基の地下室が発見されていますが、そのなかのひとつは植木屋のものとは考えにくい特殊な形態をしていました。

この地下室の床までは深さ3mもあり、階段はついていないので、脚立などで降りなければなりません。丁寧に作られた入り口を降りていくと、西と南壁には高さ80cmほどの狭い通路がありました。どうやら奥にも部屋があるようです。このようにいくつかの部屋を持つものは、植木屋では見たことがありません。

西室は、後世の建物によって残念ながら天井が崩落していました。一方南室は、奇跡的にも厚い天井が崩れずに当時のままの姿を現したのです。天井まで1mほどと低い割に奥行は3.7m(約2間)もあり、思ったより広く感じられました。床には、通路から奥まで直線的に人が歩いた(這った?)跡が残っており、奥の方では火を焚いた痕跡も見つかっています。

このような複数の部屋を有する地下室は、「麴



出土した古九谷の大皿。鮮やかだった色彩のほとんどは、残念ながら剥げていました

室」と呼ばれ、発酵用の部屋と考えられています。都内では麴町(千代田区)や本郷(文京区)あたりの町屋でよくみかけますが、豊島区内では前例がありません。

この地下室から出土した遺物も特徴的でした。青磁大皿や揃いの磁器小皿、唐津焼の緑釉大甕(壺?)など、1650年頃に作られた立派な器が目につきます。この時期の遺物がまとまって出土したのも初めてですが、どれも当時は貴重な代物です。なかでも、色絵を施した古九谷様式の大皿には驚きました。江戸時代では大名しか持てないような高級品が植木屋から出土したのです。この皿は、はたして植木屋のものなのでしょうか? 謎は深まるばかりです。

近年、染井遺跡の調査では今回のように1650年前後、染井通りがつくられた頃の資料が増えてきています。しかし、植木屋として有名になる以前、上駒込村の一村落であった染井の様子は、実はあまりわかっていません。今回発見された「麴室」や古九谷は、染井の歴史を紐解く上で、重要な鍵となっていくでしょう。

(高木翼郎)



入口の豎坑(下)から南室(左上)と西室(右)に繋がっています。部屋にはもともと天井がありました

## ～ 谷端川流域の遺跡を訪ねて ～

去る9月13日、有志らを誘い、お散歩がてら谷端川流域の遺跡を見て回りました。豊島区内を大きく蛇行して流れる谷端川は、現在暗渠となって、地上からその姿を認めることはできません。しかし縄文時代以来、水や様々な産物の供給源として人々を潤してきたことは、この流域に残された数々の遺跡の存在が示しています。行程は、JR大塚駅周辺から川沿いに進み、池袋本町にある氷川神社裏貝塚、池袋東貝塚へと達し、のち谷端川の水源地と言われる、要町の栗島神社にたどり着きました。途中、高松遺跡の某所で、縄文土器が表採された事は、貴重な発見でした。(宮川和也)



高松3丁目付近で採集した縄文土器



## ”考古学から学ぶ豊島区” 大好評！

7月の毎週土曜日、5・12・19・26日に、豊島勤労福祉会館主催の講座「考古学から豊島区を考える」において、駒込一丁目・雑司が谷・巢鴨・染井など区内の代表的な遺跡を、ご紹介いたしました。講座では最新の発掘成果を用いた話のほか、出土した弥生土器や江戸時代の陶磁器などに触れることもできました。また座学だけでなく、町歩きでは以前に発掘調査した場所での説明や、調査当時の話もありました。さらに発掘中の染井遺跡旧興銀ひろば整備地区の遺跡見学など、バラエティに富んだものとなり、受講された方には大変好評でした。(小川祐司)



出土品に触れたり、町歩きや遺跡見学もありました



## Let's try ! 考古学 親子で発掘体験！



初めての遺跡発掘！  
土の中から何か出るときに歓声があがります

8月19・20日、染井遺跡 旧興銀ひろば整備地区において、豊島区教育委員会主催の小学生高学年から中学生を対象とした親子発掘体験“Let's try ! 考古学”に協力しました。朝から暑い日差しが注いでいましたが、発掘では遺物が出土するたびに子供たちは、「これは何？」と目を輝かせていました。午後は出土した遺物の洗浄、破片の接合です。なかなか思うように接合せず頭を悩ましたり、自分が接合しているものが隣の人と同じ遺物だとわかって喜びあったりしてました。最後に記念として自分たちが接合した遺物の写真を撮り、お土産にしたのはなかなか好評でした。私たちにとっても、普段の調査ではなかなか機会のない子供たちと一緒に発掘ができて、とても楽しい催しになりました。(高木翼郎)

## 雑司が谷遺跡の案内板が 地下鉄副都心線駅構内に登場！

副都心線の工事にもなって発掘調査が行われた雑司ヶ谷駅地区をご紹介します案内板が、雑司ヶ谷駅目白通り側改札（3番出口）内の階段踊り場に設置されます（構内のため、ご覧いただくには乗車券か入場券が必要です）。設置は10月中旬ごろを予定しており、「担当調査員と行く案内板見学ツアー」も企画しますので、お楽しみに！（両角まり）



## 私の発掘体験記

～ 染井遺跡旧興銀ひろば整備地区に参加して ～

わたしの発掘調査のイメージといえば、田舎の自然の中を大所帯で古い時代の遺跡を調査していくといったものでした。実際参加した発掘現場はというと、近くにはビルが建ち並ぶ繁華街があり、なおかつ工事現場のようなところで、私の抱くイメージとはかなり異なっていました。ただ、豊島区の発掘を体験したことで自分の持つ遺跡調査に対する先入観の偏りに早く気づくことができ良かったと思っています。

参加初日は、初めての発掘調査に対する不安よりも、興味を持っていた発掘調査に参加できるという嬉しさの方が大きかったです。そんな嬉しさの中で、図面作成や遺構の掘削、写真補助などの仕事を少しずつこなしていき、一連の作業をやらせてもらうことができました。

一番印象に残っていることは、地下室の調査です。私が携わった地下室は天井が崩れることなく、ほぼ完全な状態で残っていました。入口部の地下室から下に降りていき、小さな通路から奥に進むと、かがんで中を移動できるくらいのおおきな空間がそこには広がっていました。



土層の堆積を丁寧に図面に描いていきます

壁や天井には、工具痕が無数に残されていて、地下室を造り上げていく様子を想像したりと、室内に入ることによりリアルに感じとることができました。江戸時代の初期頃に、この地下室が埋まってから私が入るまでの間は、誰も入ることがなかった場所だということを考えると不思議な感じがします。誰もが経験できる事ではないので貴重な経験ができて嬉しかったです。

発掘調査に参加することの醍醐味は、出土遺物や遺構をその場で見て触れられることだと思います。博物館の展示物や教科書の内容だけでは理解できなかったことも、実際に体験することですんなりと頭に入り、また学ぶことも多かったです。江戸時代のこの地が植木屋であったこともあり、出土する遺物も植木鉢といった植木屋に関連するものが多かったです。その他、陶磁器のような材質や器種などの多様な遺物に触れることができたのは収穫でした。

苦勞することもありました。例えば、遺構を掘削する際には掘ってよい土、いけない土を見極めなければならず、初めのうちは土の違いを識別することが困難で掘りすぎてしまうこともありました。また図面を作成するにあたっては、実物を正確に記録していくという責任感が常にあったので難しかったです。しかし悩んでいる時には、調査員や作業員の方々から教えてもらい、疑問だらけの私の質問にも丁寧に答えて頂きました。心から感謝しています。また、和気あいあいと色々な話しができたこともあって、現場では不安を感じることもありませんでした。皆さんのおかげで本当に充実した一ヶ月間を過ごせたと思います。

(大正大学1年 月岡千栄)

### 【編集後記】

今年はいつもの年より1ヶ月季節が早く流れている気がします。

この夏は染井遺跡でのイベントが目白押しとなりました。暑いなか頑張ったみんなの健闘ぶりを、ぜひお読み下さい。(担当小川)

編集・発行

特定非営利活動法人  
としま遺跡調査会

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨3-8-9 巣鴨複合施設201号室

Tel・Fax 03-3915-6962

E-mail tics389@atoshima.ne.jp

ホームページアドレス：<http://www.toshima-iseki.org/>

題字：湯澤和子 ロゴデザイン：石原幸